



『平家物語』源頼朝礼讃記事異文考：画題奥州征伐・上洛錦絵を読む

著者	信太 周
著者別名	SHIDA Itaru
雑誌名	文林
巻	42
ページ	29-48
発行年	2008-03-20
URL	http://doi.org/10.14946/00001576



『平家物語』 源頼朝礼讃記事異文考

—— 画題奥州征伐・上洛錦絵を読む ——

信 太 周

一

『平家物語』に展開する義経の末路に言及して、早川厚一による、

義経と頼朝との直接的な対立を避け、むしろ頼朝との対立に巻き込まれていく義経を描く方法と、延慶本を初めとする『平家物語』が、都から奥州に逃げた義経の最期を記さないことは無縁ではなからう。（『平家物語』

の成立——源義経像の形象」『名古屋学院大学論集（人文・自然科学篇）』、41巻1号）

との指摘は興味深い。もっとも、『吾妻鏡』にも収録する「腰越状」を欠く延慶本等が、へ日来不儀の聞えあるによつて、たちまちに御気色を蒙り、鎌倉中に入れられず（『吾妻鏡』元暦二年五月廿四日条）との記事に反し、平宗盛父子を護送してきた義経が頼朝に見参する場面を設定している——ことは異本論に属することであるが、この場面、頼朝と義経との対面のあったことを記さない、現在、『平家物語』の定本に位置付けられることの多い高野本の該当

個所脚注では、

延慶本など広本系諸本は、義経は頼朝と一度対面したことになっている。このように一度も対面が許されないことになったのは、義経の悲劇を強調しようとするためであろう。（梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』、新日本古典文学大系所収、岩波書店刊）

と説明されている。△義経と頼朝との直接的な対立△に関する、異本化作用の顕著な例と言えよう。

ところで、大方の『平家物語』が、△今日陸奥国において、泰衡、源豫州を襲ふ。これかつは勅定に任せ、かつは二品の仰せによつてなり云々△（『吾妻鏡』文治五年閏四月卅日条）とあるような窮極の△義経と頼朝との直接的な対立△とも称すべき義経最期談を記さないなかで（拙稿「源義経の末路——画題義経蝦夷渡錦絵を読む」、『文林』41号）、義経最期以後の頼朝得意の場面を画題とする錦絵が目につく。

例えば、頼朝の奥州征伐。『吾妻鏡』には、△義経、泰衡に襲はれ自殺す△（文治五年閏四月卅日条。貴志正造訳注『全譯吾妻鏡』、新人物往来社刊の記事見出しによる。以下同じ）以降の頼朝の動靜につき、△奥州追討の宣旨を重ねて請ふ△（同五月廿五日条）、△宣旨を待たず追討を決意す△（同七月十六日条）、△奥州追討軍の部署を定む△（同十七日条）、△頼朝奥州に進発す△（同十九日条）等詳細な記事が展開する。奥州征伐の終結、△泰衡の殘党討滅の事を京に報ず△（同九月十八日条）、△奥州合戦の勳功賞を行ふ△（同廿日条）、△頼朝、鎌倉に還向す△（同廿八日条）、△頼朝鎌倉に帰著、消息を京に進ず△（同十月廿四日条）に至るまで延々四ヶ月に亘る遠征、この間の、△頼朝白河の関を越ゆ△（同七月廿九日条）、△泰衡、阿賀志山中心に防衛す△（同八月七日条）、△阿賀志山の合戦△

△泰衡奥方に退却、国衡逃亡す▽△国衡討死す▽（同十日条）、△泰衡を追ひて平泉に向ふ▽（同廿一日条）、△泰衡、
郎従河田次郎に誅せらる▽（同九月三日条）、△河田泰衡の首を持参し、誅せらる▽△泰衡の首を梟く▽（同六日条）
等の戦況報告は、

およそ奥州御下向の間、鎌倉御出の日より、御還向の今に至るまで、毎日御羞膳・盃酒・御湯殿おのおの三度、
さらに御懈怠の儀なしといへども、つひにもつて民庶の費を成さしめざるところなり。上野・下野両国の乃貢を
運送すると云々。人もつて欽仰せずといふことなし云々。（同十月一日条）

と総括するように、全てこれ頼朝讃嘆の記事たりえている。

このような奥州征伐を画題とする錦絵の数々——浅井收編著『浅井コレクション全集 1』（浅井コレクション刊）
には、「文治五年源頼朝卿奥州征伐ノ図」（芳虎画、推定弘化年間刊。図版A）、「陸奥国白川表大合戦之図」（芳虎画、
推定嘉永年間刊。図版B）、「源頼朝公奥州泰衡征討之図」（芳虎画、元治元年刊）、「奥州高館合戦」（国芳画、推定
嘉永年間刊）、「奥州大合戦之図」（芳虎画、推定嘉永年間刊）、「奥州大城戸大合戦之図」（芳虎画、万延元年刊）、「頼
朝奥州平泉合戦水責之図」（国芳画、推定嘉永年間刊）が収録されている。他に管見に入った錦絵は、東京都立中央
図書館特別文庫室所蔵「鎌倉勢奥州進発之図」（国芳画、天保・弘化期刊。図版C）。なかで、「陸奥国白川表大合戦
之図」（芳虎画）と「鎌倉勢奥州進発之図」（国芳画）は画中解説に夫々次のように記す。

鎮守府將軍陸奥守藤原泰衡朝臣は秀衡の次男にて家督す。秀衡病死して後、鎌倉の命によつて義経公を討奉ると

いへど、大將軍頼朝其不義を怒り奥州を征伐せんと文治三年七月廿三日五拾二万余騎を卒して進発す。泰衡陸奥出羽両国の軍勢五十七万騎を下知して防戦す。大手先陣畠山重忠大木戸へ向ふ。搦手の大將は三河守範頼公として攻る。奥州の副將軍西城戸太郎時衡ゆう軍の大將として、樋爪五郎尊衡知勇兼備の良將にして鎌倉の大軍をやるること度々なりといへ共、天うん利なくしてことごとくほろびにけり。頼朝公二州をたいらげおさめ給ひしとぞ。(芳虎画「陸奥国白川表大合戦之図」)

文治四年七月、源二位頼朝公五十二万之軍兵卒シ、奥州泰衡征伐之図。(国芳画「鎌倉勢奥州進発之図」)

文治五年であるべき頼朝の奥州征伐の肝心の年号の確認を怠るなど何の其の、『義経記』にこそへ重忠を初として、都合その勢七万余騎奥州へ発行す(卷八)と伝えるものの、へおよそ鎌倉出の御勢一千騎云々(『吾妻鏡』文治五年七月十九日条)の筈が共にへ五拾二万余騎と軌を一にするなど、典拠は不明ながら、頼朝出陣の晴れの場を演出して余り有る。また、「奥州高館合戦」(国芳画)と「頼朝奥州平泉合戦水責之図」(国芳画)——『吾妻鏡』には、へ泰衡が平泉の館に著御。主はすでに逐電し、家はまた烟と化す。数町の縁辺、寂寞として人なし。累跡の郭内、族滅びて地あり。ただ颯々たる秋風、幕に入るの響を送るといへども云々(文治五年八月廿二日条)と記すなどさしたる激戦はうかがえない筈が、『絵本太閤記』「高松の城水攻め」(三編卷之六)の場面を投影する図様であるなどは、当時、『太閤記』の画が大流行していたことと関連させて捉えるべきものであろう(岩切友里子「太閤記の世界」、

『浮世絵大武者絵展』所収、町田市立国際版画美術館刊)。ただそれにしても、頼朝の晴れの奥州征伐また人々周知の関心事でなければ、成り立たない見立てである。

奥州征伐後の、建久元年十月から十二月にかけて、同六年二月から六月にかけての上洛もまた頼朝得意の場面であった。

この両度の上洛に関する錦絵は、浅井勇助『近世錦絵世相史』第一巻(平凡社刊)に、「源頼朝公上洛之図」(二代広重画、文久三年三月刊)他多数紹介されている。ただし、ハ文久二年九月七日、家茂上洛を明年二月と達するVハ同十二月十五日、一橋慶喜、京都に出発Vハ文久三年二月十三日、徳川家茂、東海道を京都に出発Vハ同三月四日、家茂、徳川家光以来二百二十九年ぶりに上洛し二条城に入るV(『年表日本歴史』第五巻、筑摩書房刊)等の時勢とあれば、これ等錦絵の数々は、清和源氏末裔たる徳川家茂の上洛を源頼朝のそれと見立てたものと説明されるのも頷ける。浅井勇助によれば、「足利義政公東山遊覧行列図」(芳虎画、文久二年九月刊)も、

家茂將軍上洛の先発として、十二月十五日、一橋卿が二万の兵を率ゐて、入洛した。当時の新聞記者であつた浮世絵師の早耳は、この事が確定すると、特種として、画筆を揮つて、チャーナリズムを発揮し、既に九月発行してゐる。將軍を頼朝と呼ぶのと、区別すべく一橋卿を足利義政とした。

と読み取るべきの由、報道としての錦絵の一面を伝えるものとして興味深い。

両度の上洛をわざわざ意識して、「建久元年源頼朝卿上京行粧之図」(貞秀画、文久二年十月刊)と「建久六年源頼朝卿上京之図」(二代広重画、文久三年二月刊)と画題を区別する錦絵も見られるが(浅井勇助『近世錦絵世相史』

第一巻所収)、参考のため、「源頼朝公上洛之図」(二代広重画)と図様の通う、手許の「源頼朝公上京之図」(国綱画、文久三年三月刊。図版D)を掲げておく。東京都立中央図書館特別文庫室所蔵「頼朝公御上洛駅路双六」(貞秀画、文久三年十月刊。図版E)のへ上りVの図様が頼朝の昇殿拝謁の場面であるなど、子供の遊び世界にまで家茂上洛と見立てが成り立ち浸透するには、頼朝上洛の晴れの場面また周知のことであったとしなければなるまい。なお、東京大学史料編纂所錦絵データベース所収「源頼朝大仏供養之図」(国芳・広重画、天保・弘化期刊)は家茂上洛情報よりも十数年先立つのでこれとは無縁、建久六年の頼朝上洛のみが題材の錦絵であり、また、「源頼朝公奥州発行之図」(貞秀画、元治元年一月刊。図版F)は、馬上烏帽子姿の頼朝を描いて奥州征伐の図様とするにはふさわしくなく、刊行年から見ても上洛のさまを描いたもの——へ発行Vとあってへ征伐Vへ進発Vではないなど、ひとひねりもふたひねりもした見立てが成り立つあたり、当時の人々の歴史教養、関心の深さが見てとれる。

二

江戸時代後期、錦絵の題材としてもはやされた頼朝の奥州征伐と上洛につき、『平家物語』諸本の記事展開やいかん——整版流布本では、義経の末路を、

明くる四日の日、大物の浦より船にて下られけるが、折節西の風烈しう吹きければ、判官の乗り給へる船は、住吉の浦へ打上げられて、それより吉野山へぞ籠られける。吉野法師に攻められて、奈良へ落つ。奈良法師に攻められて、又都へ帰り上り、北国に懸つて、終に奥へぞ下られける。(卷十二「判官都落」。高橋貞一校注『平家物

語』、講談社文庫。底本は元和九年刊本)

と記すだけ。平泉での義経最期にまで及ばない以上、頼朝の奥州征伐に言及する余地などある筈がない。さらに、 \wedge かくて建久十年正月十三日に、頼朝卿五十三にて失せ給ひしかば云々 \vee （「六代被斬」）に至るまで頼朝上洛の記事は見当らない。

ただし、高橋貞一校注『平家物語』巻十二「六代被斬」脚注で、 \wedge 覚一本等には平家残党誅伐の事がある \vee として、補注でその欠文を補っており、そこには、

去程に建久元年十一月七日鎌倉殿上洛して、同九日、正二位大納言に成給。同十一日、大納言の右大将を兼じ給へり。軈て両職を辞て、十二月四日関東へ下向。（略）同六年三月十三日、大仏供養可有とて、二月中旬に鎌倉殿上洛。同十二日、大仏殿へ参らせ給ひたりけるが云々。

と両度の上洛記事が記しとどめられている。流布本形成にあたっての不用意な脱文ではあるうが、それにしても以後補訂されることもなく、頼朝得意の場面の再現にはずいぶん冷淡な構成と読み取れる。

一方、平泉での義経自害にまで言い及ぶ『源平盛衰記』ではあるが、義経自害の後を、

父の遺言をそむき、安衡義経をうちたりけれ共其せんなく、源二位頼朝奥入して、やすひらをば被誅れけり。

（延宝八年刊『源平盛衰記』巻四十六「義経行家みやこを出る事并よしつね始終の有様の事」）

と簡潔に記すにとどまり、また、両度の頼朝上洛の記事を収めることもなく、頼朝讃嘆については素っ気ない構成となっている。『平家物語』と『源平盛衰記』流布本の行文からは、錦絵にうかがえるような頼朝礼讃など読み取るべ

くもない。浮世絵師をして駆り立てたあの熱気は何に拠るのであろうか。

写本として伝わるのみ、どの程度の範囲で読まれたのかその浸透度は心許ないが、簡略ながら義経の最期までを記す八坂流二類本と四類本は（拙稿「源義経の末路——画題義経蝦夷渡錦絵を読む」、『文林』41号）、頼朝の奥州征伐と上洛に言及する。ちなみに、八坂流二類本と位置付けられる奥村家本『平家物語』卷十二「法性寺合戦」の一節は次の通り。

判官をば終に討奉てけり。康衡頼衡此由を鎌倉へ申たりければ、鎌倉殿いかゞは思召れけん、さらば奥をも責らるべしとて放生会をば七月一日に引あげ、同七月十八日に十八万騎（四類本諸本は十万余騎）にて鎌倉を立て奥州に発向し、七月より合戦はじめ八月九月三ヶ月が間に奥州羽州両国を責したがへ、康衡頼衡を先として戦者を討捕り落行者をば助られけり。それより郡々に代官を居をき、我身はいそぎ鎌倉へこそかへられけれ。去程に鎌倉には此二三ヶ年が間は京都の騒国々の乱に就て公の御年具も奉らねば其恐有とて、公の御年具奉らる。并に鎌倉殿は上洛とぞ聞えし。同十一月七日の日都にのぼり六波羅に落つき給て、同九日の日院参申、正二位大納言にあがり給ふ。兵衛尉十人靱負尉十人共に卅人を召つかはるべき由を仰下されけれども、是頼朝が為には余に過分の至なるべしとて十五人を辞し申されて残り十五人を召つかはれける。同廿二日に小野の行幸の御供仕り右大将にあがり給ふ。去程に鎌倉殿は大將大納言両官を辞申されて、同十二月三日の日鎌倉へこそ下られけれ。（山下

宏明編『八坂本平家物語』、大学堂書店刊）

△頼朝入洛す▽△六波羅新亭に着く▽（『吾妻鏡』建久元年十一月七日条）に始まり、△頼朝院・内に参上す▽△頼朝大納言に任ぜらる▽（同九日条）、△頼朝任大将の院宣▽（同廿二日条）、△頼朝、両職の辞状を進ず▽（同十二月三日条）と続く儀式を書きとどめたなかに、確かに、

前右大将家、院内に参らしめたまふ。数尅御祇候。御家人十人成功に募り、左右兵衛尉・左右衛門尉等に举任せらる。これ度々の勲功によつて、廿人を举し申すべきの旨、仰せ下さるるところなり。幕下しきりにこれ辞し申さるといへども、勅命再往の間、略して十人を申し任ぜらると云々。（同十二月十一日条）

の記事がある。八坂流二類本・四類本の建久元年の上洛にかかわる独自異文は任官人数に齟齬はあるものの、頼朝威勢のさまを描く『吾妻鏡』に通う。

三

「九郎判官都ヲ落事」（第六末）に欠落箇所はあるが、義経自害とそれに引き続く頼朝奥州征伐記事の見当らない延慶本にして、最終巻第六末巻尾が、『六代勝事記』の頼朝礼讃記事に基く、「右大将頼朝果報目出事」で締め括られていることが注目されてきた。『六代勝事記』当該記事を引いてみる。

征夷將軍二位家、西海の白波をたひらげ、奥州の緑林をなびかして後、錦のはかまをきて入洛。黄門・亜相をへて、羽林大將軍に任ぜり。拝賀の儀式、希代の壯觀也。仏法をおこし、王法をつぎ、一族の奢をしづめ、万人の

愁をなだめ、不忠のものをしりぞけ、奉公のものをすゝめ、あへて親疎をわかず、まったく遠近をへだてず。(弓削繁校注『六代勝事記・五代帝王物語』、三弥井書店刊)

この記事をもそのままに取り込み、続けて、

ユ、シカリシ事共也。此大将十二ニテ母ニヲクレ、十三ニテ父ニハナレテ、伊豆国蛭ガ嶋へ被流給シ時ハ、カクイミジク果報目出カルベキ人トハ誰カハ思ヒシ。我身ニモ思知給フベカラズ。人ノ報ハ兼テ善悪ヲ定ムベキ事有マジキ事ニヤ。何事ノオハセムゾト思給テコソ、清盛公モユルシ置奉リ、池尼御前モイカニ糸惜ク思奉給トモ、我子孫ニハヨモ思カヘ給ハジ。「人ヲバ思侮ルマジキ物也」トゾ、時人申沙汰シケル。(北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語』、勉誠社刊)

と書き加えた態の頼朝礼讃で終る延慶本の構成——延慶本における他の『六代勝事記』記事引用で章段こそ違え流布本にまで引き継がれている箇所のあることは諸注指摘するところであるが、肝心の『平家物語』全巻の構想を裏付けるべき記事が後述大島本を除いて、古態本とされる延慶本の独自異文で引き継ぐものがないなど、異本論の根本義にかかわる課題である。

それにしても、承けるべき具体的な記述を欠いてのハ奥州ノ緑林ヲナビカシテ後▽ (延慶本) との総括には違和感覚えるが、「シンポジウム 平家物語の終わり方」(『軍記と語り物』35号) で、早川厚一は延慶本を担当、伊豆流離中から征夷大將軍が予測、予祝されていたとの頼朝の造型は古態本としての延慶本終結部とハみごとに照応する▽と

読み解いている（『平家物語』の成立——延慶本の終結部から）。佐伯真一「源頼朝と軍記・説話・物語」（『平家物語遡源』、若草書房刊）も、延慶本の頼朝勝利を説いての結末につき、△古態論としてこれらの記事が古い段階に存在したか否かは別として、また、個別異本固有の問題は別として、作品自体としてこれを結末としなければ成り立たないというほど本質的要素とは認められない云々△とその独自異文である所以に言及はするものの深入りすることなく、頼朝体制樹立への寿祝の表現の出発点が『平家物語』等に認められると説く。△奥州ノ緑林ヲナビカシテ後の落ち着きのなさにこだわるなどは瑣末に過ぎるということであろうか。

ところで、大島本『平家物語』巻十二末尾のみ延慶本に通うことが指摘されてきた。

かくて平家の子孫底を振失給ぬ。又鎮守府將軍藤原秀里が末葉、秀衡が子息通衡、康衡等、させる朝敵をも平げず、奉公もなけれども、出羽奥州両軍を管領して国司の下知にしたがはず、追伐すべき由の勅宣によて、文治五年七月、源二位卿発向せられ、康衡不日に退治す。加之本朝の外、東海は毛人嶋、西海は鬼かい嶋に至まで打とり畢。前代後代にも有がたし。希代不思議將軍也。（北川忠彦・西浦甲佐子「天理図書館蔵大島本平家物語巻十二（翻刻）」、『ビブリア』79）

頼朝礼讃を以て結びとして軌を一にすること——ただし、奥州征伐にのみ絞っての讃嘆は延慶本と相違する等『六代勝事記』の引き写しとは断じえず、また、江戸時代初期の写本とされる大島本にあって、『参考源平盛衰記』（元禄

二年成立)にも採録されることのなかった稀書延慶本の直接参照なども草々には想定しがたいところである。巻一から十一までが一方系、巻十二のみ灌頂巻を特立させない故を以て八坂系とされる大島本であるが、巻十一後半から巻十二前半への展開は整合し、△別本ながらきちんと前巻に接続Vする(北川忠彦「大島本平家物語巻十二をめぐって」、『天理図書館善本叢書』月報43、八木書店刊)とあっては、単なる寄せ本で片付けるわけにはゆくまい。『平家物語』諸本研究における系譜法の限界——小西甚一による、

従来は『平家物語』の本文系譜を立てようとする無益の試みがしばしばなされたけれども、説話性をもつ作品のばあい、書誌的な原因による本文変化と同性質の系譜を設定することは、そもそも不可能なのである。『平家物語』などの本文批判は、勅撰集や和文日記の類と別な原理のもとでおこなわれなくてはならない。(制作・享受・伝承)、『日本文藝史』Ⅲ、講談社刊)

との厳しい論難のあることは銘記せねばなるまい。

四

△近世中期に江戸の地で人々が頼朝という人物に関してどのような知識を有していたのかを明らかにする上でV有効な資料として翻刻紹介された(黒石陽子「『頼朝一代記』について」、『叢』16号・17号)、画工・作者未詳『頼朝一代記』(延享元年刊)は、△かくて頼朝をぐる平家をほろぼし、せいむをおさめ給ひし事ひとへに正八まんのをうご也とて、みづから八の字のがくを遊ばし鳥居がけ給ふ。今につるがをかへ参けい申す人此がくをはいすといへりVと

結んでいる。同題の、南仙笑楚満人作・鳥居清長画『頼朝一代記』（天明三年刊）、二世南仙笑楚満人作・歌川貞秀画『頼朝一代記』（天保六年刊）と刊行が続くなど、以て頼朝に寄せる関心の高さがうかがえよう。

うだいせうよりも公ぢせうよりこのかたあまねく一天下をおさめ、くわん大なごんくらゐ二位にのぼり給ひ、万人にじんせいをほどこしきみのしんきんをやすめたてまつり、そのうちせうぢぐわんねん正月十三日おんとし五十三才にてせいきよましくける。やがてわかぎみ左中ぜうよりいへあそんよりも卿の御ゆひせきをつがせ給ひ、御ぐわいそなればほうでうとほくみのかみときまさすなはちこれをほさしかまくら二代しやうぐんとあほぎまるする。るいだいなみしづかにしてしよみんばんぜいをとなへ、げんけちやうきうはんゑいとしゆくし、ぶけいつとうのてんかとなり、五こくもおのづからみのり、かみいちにんよりしもばんみにいたるまでよろこびたのしむことかぎりなし。めでたしく。（二世南仙笑楚満人作『頼朝一代記』巻尾。九州大学文学部国文学研究室所蔵、国文学研究資料館提供電子複写版による）

これ等清和源氏末裔と称する徳川氏崇敬に発する頼朝礼讃記事の数々——画題奥州征伐・上洛錦絵また一連のものとして捉えるべきことであろうが、このような風潮は『平家物語』享受にも退跡を示している。原典をたくみに通俗化したと評される、秋里籬島著『源平盛衰記図会』（寛政六年刊）、高井蘭山著『平家物語図会』（前編文政十二年刊、後編嘉永二年刊）は、夫々、末尾建礼門院御往生の記事を承けて、

抑右大将頼朝卿は、治国平天下の計をめぐらし、平氏の恨を義経一人に蒙らしめ、追討の宣旨を蒙り滅されし事は、深き思慮ある計略とぞしられける。文武いちじるしくて、などか北條梶原如きの讒を用ひ給はんや、今六百

余歳の後、武門の繁栄は、此將軍の胸中より出たる籌の全とぞ思はれける。（『源平盛衰記図会』卷六「法皇大原御幸」、日本歴史図会所収）

平家二十余年栄花の夢も、こゝに至つて覚尽し、源氏の世は今を日の出の盛になり、それより以来幾千年も、源氏より天下を治め給ふ事、寔に目出きためしなり。（『平家物語図会』卷十二「御往生」、日本歴史図会所収）と結ぶ。平家滅亡を記念すべき六代の死、△三位禪師斬られて後、平家の子孫は永く絶えにけり▽等を承けての結びとしてならともかく、誠に唐突な末尾と言わざるをえないが、またこのような頼朝礼讃での締めが好まれた時代だったということなのであろう。

ところで、大島本『平家物語』卷十二末尾の頼朝礼讃記事に関する疑問——近世初期書写と推定されるだけで、改変者及び改変時期が不明なだけに、唐突な延慶本回帰とも、近世中期以降顕著な頼朝礼讃の反映とも決め付けるわけにはいかない。ただ、『平家物語』が版本で流布していた時代、あえて異本作成に踏み切った動機は何か、また改変の動機は何であれ徳川氏崇敬の潮流のなかで広く読み取られることも可能であった筈が、現存天理図書館所蔵本一種のみでとどまった所以は等、課題は尽きない。

貴重な錦絵の調査及び写真掲載につき、浅井收氏・岩切友里子氏・浅井コレクション・東京大学史料編纂所・東京都立中央図書館特別文庫室に格段のご配慮をいただいた。記して厚くお礼を申し述べる。

(図版A) 芳虎画「文治五年源頼朝卿奥州征伐ノ図」(浅井コレクション所蔵)

(図版B) 芳虎画「陸奥国白川表大合戦之図」(浅井コレクション所蔵)

(図版C) 国芳画「鎌倉勢奥州進発之図」(東京都立中央図書館特別文庫室所蔵)

(図版D) 国綱画「源頼朝公上京之図」

(図版E) 貞秀画「頼朝公御上洛駅路双六」(東京都立中央図書館特別文庫室所蔵)

(図版 F) 貞秀画「源頼朝公奥州発行之図」